

目的 幼児期の保育方法の一つとして「たて割保育・異年齢保育」と呼ばれる保育方法がある。この方法は年齢によるそれぞれの発達段階の固有性を尊重しながら保育者の介在によって相互に連携して保育活動の充実をはかる「交差保育」(松村, 1968)といえる。本研究では幼児期後期の異年齢集団活動の実践例をもとにして異年齢集団活動によって顕在化する活動内容と指導方法を明らかにする。

方法 ①異年齢保育実施保育園の観察記録の分析。②行為法・心理劇・関係理論に基づく小集団活動を実践し活動内容を分析する。参加者: 3~6才の幼児6名。指導者集団。

結果 1. 異年齢集団活動によって顕在化する活動内容例。①他者、他集団を知る活動(自分の存在を受容してくれる子を媒介として交流する)②遊びの伝承活動(相互に未知の遊びを伝えあい遊びを共有化する)③製作技術の伝えあい活動(素材となる物を分有し製作技術をマスターする)④遊びの伝播活動(一つの遊びを局所から局所へ伝えあい共通活動を展開する)⑤社会的役割、構成的役割の連担活動(集団活動の発展に必要な役割を連担しあい共存化をはかる) 2. 集団の構造化、組織化との関連でとらえられる指導方法。①下位集団(同年令、異年齢)形成の基盤づくり。外在、外接的指導(共有、分有できる物の用意、配置、領域設定などの役割)②下位集団内活動の充実、発展、集団間の交流化。内在、内接的指導(集団内個の固有性が育つようなかかわり方、通路敷設、連結化促進などの役割)③集団活動の統合化。接在的指導(下位集団の機能的役割をいかにながら集団発展の目標や方向性を明確にし、集団活動の統合化をはかる役割)